

貝原益軒における「楽」と学び

—『楽訓』を中心として—

清水真裕*

はじめに

本論は、日本近世前期を生きた儒学者、貝原益軒(寛永七年—正徳四年、一六三〇年—一七一四年)の思想における「楽」概念、ならびに「楽」と学びの関わりについて考察し、また、それを通して現代に生きる我々と「楽」との関係性を考察することを目的とする。

貝原益軒は、民衆に向けた多くの実学的著作の作者として知られている。『和俗童子訓』、『大和俗訓』、『養生訓』、『五常訓』といったいわゆる「訓もの」の一つに、『楽訓』がある。これは、益軒が八十歳となる宝永七年(一七一〇年)、人間の「楽」とは何か、人間が「楽」に暮らすための心構えや方法とはどのようなものかを説くために著された書である。「楽」に関する見解と主張は他の著書と内容を同じくしながらも、益軒の理論や感覚・感性について、より詳細にうかがうことができるものとなっている。

「楽」は、私たち人間にとって大きな意味を持つものでありながら、その捉え難さゆえに、また、過度な身近さゆえに、また、一転すれば忌避されるべきものであるがゆえに、論考する際には困難がつきまとう。そうした中で、益軒は「楽は是人心の天機、常人と雖も亦皆之あり」とい、「楽」を万人の本質的・生得的なものと位置づけ、「内の楽」と「外の楽」を種別化し、その関係性と望ましいあり方を提示した。益軒の思想の基底をなす「楽」は、その思想を特徴付け、また、今日まで彼の著作が版を重ねてきた事実からも明らかのように、人々の共感を誘うものになっている。

益軒の「楽」については、これまで、主張の概括^①、時代背景や民衆教化との関連の分析^②、彼の幅広い分野における業績との関係の考察といった研究が行われてきた。本論は、これらの先行研究中でも益軒の「楽」の諸相について最も詳細な分析を行った田畑真美氏による「貝原益軒における「楽」について」^③を踏まえ、補足を加えながら、まずその「楽」概念を整理する。さらに、これまではあまり取り上げられることなかった箇所、例えば「楽訓」節序^④等に注目し、その意図を益軒の考える「学び」を通して再検討することで、彼の思想の中に位置づける。そのうえで、益軒のいう「楽」

の性質と、それへ至るための道筋がどのようなものであるか、改めて考察してみたい。

一、貝原益軒の思想における「楽」概念について

田畑氏は、先に挙げた論文の中で、益軒の「楽」とは「人の道を全うすること」すなわち「仁」であり、それは具体的には他者への善行や、「分を安んずる」という、自己の有り様を「天命」として肯定する姿勢によってもたらされるものであるとした。

だが、益軒の「楽」は、人間やあらゆる存在を成り立たせている「気」という側面からの理解も欠かせない。益軒は、人間・世界に貫通する「気」の理論とともに「楽」を総合的に把握しており、だからこそ、益軒の「楽」概念はより理論的・実践的で説得力を持つものとなるのである。

また、本然的に人間に具わり、あらゆる善の基礎とされる「楽」であるが、それは人間の性質とどのように関わり、どのような働きをもって人間に善を行わしめるのか、また、それはいかなる過程を経て身に付けることができるかと益軒が考えていたか、それらの点についても、未だ検討の余地があると考えられる。

右のような事柄について考察を進めるにあたり、まず本章では、益軒の「楽」概念を明確かつ体系的に理解するため、その概略を「世界観」、「人間観」、「実践論」という三つの項目に分けて捉えなおしてみたい。

① 世界観

益軒の世界観は、「う」む、「恵」む、「やしな」う、「生」かすといった、天地の(人・事物を生かす働き)を中核として展開する。

〔キーワード〕 貝原益軒／楽訓／楽／学び／江戸時代

*平成二十六年年度生 比較社会文化学専攻

天地の恵みは至りて大にして、人万物をうみて、又やしなひいかし給ふ。…(中略)

…天地の理生生してやまざる故に、其生生たる得を以、よく万物を生じ給ふ。⁽⁶⁾
人間を含む万物は、けして止むことない天地の「生生」たる働きによって生み出され、愛され、恵みを受けつつ生かされていると理解される。⁽⁶⁾この天地の働きは、「天地の道」、あるいは「天地の理」、「天地の徳」等とも称される。⁽⁹⁾

また、この天地の働きは、「氣」という側面から説明することもできる。

天地の道陰陽の化、四時のめぐりはつねに和氣あり。是天地の楽なり。…(中略)
…この楽ただ人にあるのみにあらず。鶯のとび、魚のをどるも、凡禽獸のさへづりなくも、草木のさかえ、花さき、実のるも、みな是天機の發生する所、万物自然の楽なり。⁽¹⁰⁾

天地の間は陰陽の氣で満ちており、この「氣」は常に理に従い、和を保ちながら止むことなく流行し、四季の循環をもたらしている。⁽¹¹⁾その様子は「天地の楽」と称される。⁽¹²⁾また、この「氣」が盛んに動いている姿は、その「氣」が生み出す様々な物が活動する様子からも見て取ることができる。人や禽獸草木といった形あるものは、この陰陽の流行によって「化生」される。それら様々な生物が、各々の性質に従っていきいきと生育し躍動する姿は、それら各々生物の「楽」、また、「万物自然の楽」であると理解されている。⁽¹³⁾すなわち、天地が生み出すあらゆるものには、本能的に「楽」が具わっており、また、生きている様そのものが、「楽」であると考えられているのである。

② 人間観

さて、右記のような「楽」は、天地が生み出した存在である人間にも生得的に具わっているといえる。人間にあつても、「楽」はその自然な性質・特性をいきいきと發揮しているときの状態を指すのである。

ところで、人間には、天地のその他万物とは異なる特性がある。それは、(人・事物を恵み生かすという天地の働き)が、人間にも厚く具わっているという点である。この働きあるいは徳は、人間にあつては「仁」と呼ばれる。

およそ人は、天地の万物をうみそだて給ふ御めぐみの心を以て心とす。此心を名づけて仁と云。仁は人の心に天より生れつきたる本性なり。仁の理は人をめぐみ物をあはれむを徳とす。⁽¹⁴⁾

人間にあつては、「天地の万物をうみそだて給ふ御めぐみの心」は、自己・他者、

また物までも一体として捉えることにより、「人をめぐみ物をあはれむ」徳、すなわち「仁」として現れる。ゆえに、「仁」は全ての人間に必然的に具わっているということが出来る。また、「仁」は、「義」「礼」「智」「信」といったその他あらゆる人間の徳の基礎となり、様々な善行の動因となるとされる。⁽¹⁵⁾

ところで、なぜこの(天地の働き)が、他の生物に比べ人間に優位的に与えられているのか、それは天が人間を万物の靈長として、特に「あつくあはれみ給ふこと、鳥獸草木にことな」⁽¹⁶⁾らせているからである。そのため、人間は物質的にも精神的にも、他の生物と一線を画した豊かな生を送ることが出来る。だからこそ、人間はその恩を深く感じ入り、自身に与えられた徳である「仁」を自覚するために積極的に学問を行い、「天地の御心」に従って生きるべきであるとされる。「仁」たる徳を存分に發揮して生きること、それが人の「道」、「道理」⁽¹⁷⁾である。⁽¹⁸⁾そして、この「道理」に従って生きることが、人間にとって本来的で望ましい姿であると同時に、「道を行ひ人を救ひ、分をやすんじ、理にしたがふほどの楽、此世の中に何かあるべきや」と述べられるように、人間の「楽」と捉えられるのである。人間は、道に従ってこの「楽」を保ち、常に自ら「楽」しんで生きるべきであるとされる。

また、この人間の「楽」は、先述の天地の「楽」と同様に、「氣」の側面から説明することもできる。

およそ人の心は天地よりうけ得たる太和の元氣あり。是人のいける理なり。草木の發生してやまざる如く、つねにわが心の内にて、機のいきてやはらぎよるこべるいきほひのやまざるものあり、是を名づけて楽と云。⁽¹⁹⁾

人間は、世界の他の存在と同じように、本来的に「氣」によって成る存在である。人間の中には、草木が生い茂るように止むことなく動く「太和の元氣」が存在し、この「氣」が適切に保たれている様が「楽」であると捉えられている。過度な欲望やストレス、外的な要因や病氣等によって、この「元氣」が滞ったり損なわれたりすることなく満ち満ちて循環している状態こそ、「楽」であるということが出来るのである。

③ 実践法

それでは、人間が「楽」という状態であるためにはどうすればよいのか。何をにおいても重要なことは、先に挙げたような人が皆生まれつき具えている「楽」を充実させることである。

人の心の内にもとより此楽あり。私欲行はざれば、時となく所として楽しからず

と云事なし。是本性より流れ出たる楽なり。外に求るにあらず。²⁵⁾

益軒は、人間の眞の「楽」は、自己の外にある何らかの物に依存するものではないという。「私欲」(物欲や怒り、憎しみ、妬み、憂い、驕り、貪り等、自己や他者の心を苦しめる原因となる様々な感情や欲望)に煩わされず、「仁」の心に従って人と和して暮らすこと、それは、誰しもが本能的に具えている「楽」、また貧富や身分、時、場所等を問わず至ることができる「楽」であり、益軒はこれを肯定する。それは、人の心に本来的に存在するという意味から「内の楽」²⁶⁾とも呼ばれる。一方、あくまで「外」の物によって得られる喜びは「世俗の楽」、特に欲を満たすための度の過ぎた享樂は、いずれも即時的に失われてしまい、例え富貴の人であってもその欲望を満たすことは難しく、限度を超えれば自己や他者の心身を損なう原因になるとして、益軒はこれを否定する。²⁷⁾

では、人間がこの「楽」を失わず保ち続けるためにはどうすればよいのか。その方法は大きく分けて二つあるといえる。

一つ目は、私欲や不満を抑えることにより、心の有り様をコントロールすることである。心が私欲によって覆われないよう、慎んで心を落ち着かせ、足るを知り、分を安んじ、人間関係の中で自他の心身を傷付けないように心掛ける。こうして「和」を保つことが、「楽」を失わないための方法である。

二つ目は、「外物」の力を借りることである。この「外物」は「外の楽」²⁸⁾と言い換えることもできる。前述のように、人間の本来的・生得的な「楽」は、もともと外物に依らず内在している。しかし、人間は実際のところ、自己の外部からエネルギーや物資、あるいは生きる気力といったものを獲得しながら生きていく。そうした「外物」をうまく利用するならば、「内の楽」を「助」けることができるのである。

外物の養を以て、内の楽を助くるは、外にある飲食衣服の養を以、内なる元気を助くるが如し。又心の内に此楽あれば、飲食などの外のやしなひも皆樂の助となる。しかのみならず、朝ゆふべの目の前にみちたる天地の大なるしわざ、月日の明らけき光、四時のめぐりゆく序にしたがへる、折々の景気のうるはしきありさま……すべて万物の生意のやまざる、是をもてあそべば、きはまりなき樂なり。²⁹⁾

飲食、衣服、そして美しい景色等に代表される「外物」から適切なものを適切に私たちで摂取し用いることは、本然的な「内の楽」を養う助けとなる。ただし、それに、正しい判断を下すための「内の楽」が保持されていることが条件となる。

「内の楽」を助けるための行動や心構えとして具体的に挙げられているのは、他者

を助けること、私欲を抑えること、和を重んじること、知足安分や堪忍、また、風月の鑑賞、ほどよい酒、旅行、独座、舞踊、詠歌、交友等である。³⁰⁾これらの正しい「楽」は、人間の心を眞の喜びで満たし、かつ人間の心が「私欲」で満たされないように保つことができる。

なお、「楽」を目指すためのこれら実践法に関しても、これまでと同じく「氣」の働きという面から見ることもできる。

人の元氣は、もとは天地の万物を生ずる氣なり。是人身の根本なり。人此の氣にあらざれば生ぜず。生じて後は、飲食、衣服、居所の外物の助によりて、元氣養はれて命たもつ。³¹⁾

例えば、人間は食事によって「元氣」を養うのであり、運動や体を動かすことによって「氣」が滞るのを防ぎ、居所によって「風寒暑湿」のような「邪氣」を防ぐ。³²⁾さらには、後述のように、天地が作り出した美しい自然に触発されることで、人間は自己の「氣」を活性化させることができるのである。

ところで、ここで一つ補足を行っておきたい。本論では、「楽」に関する理論とその「氣」に関する理論を便宜上別の視点で扱ってきた。だが、益軒においては、先に「太和の元氣」³³⁾と定義されていた点からもわかるように、それらはむしろ区別されることのない同一の事態として認識されていたと理解するべきである。

以上、益軒の「楽」概念について、三つの視覚から理論的な整理を行ってきた。ここで確認しておきたいことは、益軒のいう「楽」は、何らかの対象に関する単なる(楽しみ)という感情のみを指しているわけではないということである。益軒は、「楽」について、「別に」物ありて之を樂しむに非ず。若し道を以て樂と為すと謂はば、道と樂と二となり了る。³⁴⁾という。益軒は「楽」を人間の「道」(＝人の生き方・あり方)そのものであるとし、互いに別々のものと捉えるべきではないと考える。つまり、「道」に沿った生き方は「楽」であり、「楽」に生きることは「道」なのである。益軒のいう「楽」は、人間の自然な本来の性質であり、それに従う生き方や状態であり、さらに、それに付随する感情という、人間の在り方の総体を指すものであるといえる。

二、「楽」と学び

『楽訓』の構成と内容について

さて、ここで、彼の著書『楽訓』に立ち戻ってみたい。『楽訓』は、「総論」(巻之上)、

「節序」(巻之中)、「読書」、「後論」(巻之下)という構成から成っている。「総論」では、前章で示したとき人間の「楽」に関する理論や、真の「楽」へ至るための種々の実践が勧められている。そして、「節序」では、四季折々の自然景の美しさや行事の楽しみ等が多くの紙幅を割いて饒舌に語られている。また、「読書」では、本を読むことによつて多くの知識を得、万物の理を悟ることの喜び等が述べられ、最後の「後論」においては、人生の短さや人として生を享けることの幸運を説き、真の「楽」を志向して生きることを改めて読者に勧めるという構成になっている。

『楽訓』の組み立ては右のようなものであるが、そこに記されている思想についてまとめようとするとき、前章のように「楽」の理論を明らかにするのみでは、『楽訓』全体に表されている益軒の意図や主張を捉えきれないのではないかと懸念が生じる。例えば、「節序」では、四季折々の自然との触れ合いと、それによつて表出する感情が滔々と述べられている。たしかに、自然の鑑賞は益軒が「総論」において挙げた「楽」に至る一つの方法ではある。しかし、このような益軒の個人的感情が述べられていると思われる箇所は、益軒の「楽」に関する理論を整理するという作業の上では切り捨てられるしかない。なぜなら、それはあくまで一個人の感性、感覚、好みを示されているに過ぎず、その思想に関する理論体系に位置づけることはできないと考えられるからである。これまでの益軒の「楽」に関する研究においても、こうした感性に立脚していると思われるような益軒の主張と、「楽」理論との繋がりが明確にされることはなかった。そこで、本章では、『楽訓』に記されているこうした叙述と「楽」との関係性を、益軒の「学び」という視点から捉えなおし、それが『楽訓』という書の目的とどのように関わっているかを考察していく。

益軒の学び

まず、益軒にとつての「学び」とはどのようなものであるかを確認しておきたい。前章で確認したように、益軒にとつて学びの要となる「道」や「仁」は、もともと人間に生来的に付与されているものであった。そのため、それはけして一般の人々の生から乖離した高遠なもの、深遠なものではなく、身近で切実なもの、理解や共感が可能なものである。しかし、それでもなお「仁」が広く行われるためには、一人一人の人間がそれを学ぶことにより、改めて自覚しなおすことが必要となる。なぜなら、そのような「道理」は、誰もがたやすく看取できるものではないからである。

又我が身の万のわざに皆一定の道理ありて、暫時もこの道をはなれがたし。凡夫

といへども此行ふべき道理のそなはること聖賢とかはらず。……されども、凡夫はこの道能くしり、能く行ふことかたし。³⁶⁾

このため、学者や先達は、「道理」を人々に広める工夫をしなければならぬ。よつて、益軒がその多くの民衆向けの著作の中で述べるのは、彼自身の勉学や実証研究、経験、観察、感覚等からもたらされた、人間の「道理」である。³⁷⁾ また、そのような認識の上でなされたのが、本草、養生、教育等、様々な分野に及ぶ益軒の理の追求、「窮理」であるといえる。

また、益軒は人の物事の見方や聴き方、動き等にも、「仁」に則つた適当な方法、「理」が存在すると考えている。益軒は、そのような方法を「わざ」、「礼」と呼ぶ。

人の身のわざは視聴言動の四にすぎず。四のわざに皆天然の則ありて、行ふべき道理あり、是を礼といふ。…(中略)…心と身との非礼をいましめて、非礼にして物を見、物をきき、物をいひ、非礼にしてかたちをうごかすことなかれ。かくのごとくすれば、事々皆礼にかなひて、人欲の私なく、天理行はれて、本心の徳かけず。是すなわち仁なり。仁とは人の本心の徳也。³⁸⁾

「道理」に適つた行い(「礼」)は、すなわち「仁」に従つた行動ということになる。しかし、繰り返したくなるが、これらの「理」が必ず人々に共有され、実行されているとは限らない。このような「道理」が人々の間で常に行われるためには、まず、その道理が「知」られる必要がある。益軒は、学びにおいて、「知」と「行」の双方を重視する一方、「学問の法は知行の二を要とす。…万のこと先知らざれば行ひがたし。故に前後をいへば知るを先とす、知るは行はんためなり。」³⁹⁾ といひ、「行」うためには、何事もまず「知」ることが必要であるとした。それが、人間が「道」に至り「仁」を体現して生きるための学びの順序である。

「内の楽」とは何か

さて、再び視点を益軒の「楽」に戻し、この「楽」の本質とは何かという問題について考えてみたい。前章において示したように、益軒の「楽」は「道」、状態、事物、感情等、非常に広汎な意味を有している。しかし、益軒の述べる理想的な「楽」の核心を担うのは「内なる楽」である。この「内なる楽」とは、果たして何なのであろうか。それは、(人間に本来的にそなわつていて、自己・外界に対して鋭い感覚を向け、それらを吟味し、肯定的に受け取る力(楽しむ力)と理解することができる。例えば、益軒は「内の楽」について、次のようにいう。

内の樂を本とし、耳目を以て外の樂を得る媒として、其欲になやまされず、天地万物の景気のうるはしきを感じれば、其樂かぎりなし⁽¹⁾

益軒は、内の樂に基づき、「耳目」を「媒」として自己の外部である万物の美しい有り様を感じ、欲を退けることで、人間は限りない「樂」に到達することができる。ここで、「外の樂」を得る媒となる「耳目」とは、前項で触れたとき「仁」に従った適切な物事の行い方（この場合は捉え方）を指していると考えられる。

つまるところ、益軒の「樂」の根幹とは、様々な事物に対する（感覚を研ぎ澄ますこと）であると考えられる。すなわち、「内の樂」は、〈感受性〉と読み替えることも出来よう。この感受性の向けられるべき対象は自然の景観ばかりでなく、自己や人間の心の本質、世界やその働きの中に現われている「理」、読書から得られる様々な知見等も含まれる。また、天命を意識すること、善行を行うといったことも、物事に対する自己の感覚を磨き、理解や反省を深めることと密接に関わっている。

心あきらかにして世の理をよく思ひしり、物に情あらんひとは我が心に樂あるをしつて本とし、身の外の四の時をりにつきて、天地陰陽の道の行はるるをもてあそび、天地の内なる万のありさまを見きくにしたがひて、耳目をよるこほしめ心を快くし、其樂極りなくして、手のまひ足のふむ事をしらざるべし⁽²⁾。

益軒は、自己存在を含めた万物に感じ入るための感性、世の道理を洞察する力を養い、それをもって「樂」しみとする姿勢を持つべきであり、また、それによって人間は計り知れない「樂」に到達することができるのである。もちろん、その感性を向けるべき対象、そこに生じるべき感覚等は、益軒によってある程度方向づけられている。益軒が望ましいとするのは、〈人は天に恵まれて存在である〉、〈美しい自然景に触発される〉といった、彼自身の理論に沿うような捉え方であり、また、それらを「樂」しみとして受け止めることのできる感覚である。また、外界に向かう感覚であれば無制限に肯定されるわけではなく、人は「色を見、こえを聞き、物くひ、香をかぎ、うごき、しづかなる五のわざ、欲少くよきほどに過こす⁽³⁾」べきであり、過度な刺激と欲に自身が苦しめられることのないようにと戒めている。

また、この「樂」を發揮することにより、その他の欲への執着や、欲の発現それ自体を抑制し、「仁」の心を保つことができると考えるのも益軒の特徴である。風月に感じ入り、「心を開き、其情を清くし、道心を感じ興し、鄙吝をあらひ尽すべし。是を天機に触発すといふ⁽⁴⁾」という表現からも明らかであるように、益軒にとって感受性を發揮することは、直接「道心」・「仁」の発露に繋がる。

すべて一とせの内、月日のめぐり、四時の行はれ、百物のなれる、……しづかにしてこれを感じる人は、其樂ふかかるべし。もしよく此理をしれらん人は、即仁をしれる人なるべし⁽⁵⁾。

天地の有様に心を開き、自分自身、他者、社会、自然等を一体と感じ取るための感性の發揮は、生得の「仁」の発現の一形態であると捉えられる。逆に、そうした感覚が閉じられており、「私欲」や身を損なう「世俗の樂」に囚われている場合、心は負の感情に覆われ、「氣」は塞がっている。それは、内的な感覚を研ぎ澄ますことなく、安直な楽しみに囚われ、それを求めてかえって苦しんでいる姿であり、これは「不仁⁽⁶⁾」と評価される。

「樂」たる感受性の獲得と發揮は、すなわち「理」・「仁」の実行である。そして、「仁」へと至ることこそ、益軒の学問における究極的な目標なのである。

「樂」をめぐる学びとその内容

前項で検討したような「樂」は、いわば「道理」であり、それは益軒にとつては確固として学びの対象たるべきものであった。

学びざる人は、内に在る樂を知らず、又外なる樂を空しくす。内外両ながら失へり⁽⁷⁾。

「樂」は、学ばなければ知らず知らずの内に失われてしまうものであるとされる。それは、「内の樂」も「外の樂」も同様である。私たちは通常、「樂」はあくまで一種の自然的な感情であり、学ぶべきものとは考えていない。しかし、益軒にとつて、「樂」は自然的な感情であると同時に、理性によってコントロールするために学ばなければならないものであった。それは、本来的であり、かつ普段は隠れている「道理」である。それが自覚され行われるためには、まず「知」として認識される必要がある。

さて、そのような「樂」を学ばせ、養い育てるためには、具体的な場面在即し、その感覚を開花させていく丁寧な導きが必要である。教化とは、教える側のある感覚・感性を学び手と共有していくことでもある。これを踏まえると、例えば、『樂訓』「節序」において、「いでや天地の内にみちたる四時のけしきのきはまりなき樂をいはん。」という一文からスタートし、「秋来ぬればはつ風涼しくうちふきて、草木のそよぎ、秋の声のいづくにも打なびきて、きこゆるこそ、はつ春の風にかはり、心をいたましめ、身にしてみて、金氣の至れるしるべとおぼゆれ。……」等と連なっていく明確かつ具体的な心理的描写には、重要な意味がある。四季折々の具体的な自然景と、それを

見たり感じたりする際の感覚の描出、また、歌や詩からの引用等は、物事の見方について、読者の発見と同意を促し、筆者と同様の感覚の中に読み手を捉えこんでいく。『楽訓』における益軒の狙いは、読者の感覚や見識を豊かなものにし、「仁」や「理」に関わる事柄について読者の目を開き、正しい「楽」に至るための適切な「内の楽」と「外の楽」を明らかにすることである。そして、それは益軒の考える学び手法、潜在的で望ましい状態を明らかにすることによって自覚を促すという、学びの手続きを確かに踏んでいる。すなわち、こうした感覚・感性の明示は、「楽」を「学ぶ」という『楽訓』全体の意図と深く関係しているということができる。

おわりに

益軒は、(人間が人間らしく) 生きるその様を「楽」と称し、人間はこれを目指して生きるべきであると説いた。益軒が「楽」を私たちの生の本質的なものとして位置づけたこと、さらに、その適切な様相を具体的に人々に示そうと努めたことは、おおいに評価されるものであろう。また、このように「楽」の重要性を明らかにしたことは、人間の(生)に関わるあらゆる事象に細かな視線をそそいでいた益軒の卓見であつたといえる。「楽」に生きるための契機は本来的に人間に具わっているとしながらも、そこに至るためには学び、すなわち「知」・「感性」の共有を必要とする見解も納得のいくものであり、かつ、それは現代に生きる私たちの「楽」を考えるうえで極めて示唆的なものであると考えられる。

「楽」(たのしみ) という人間の感情とその状態、また、それを引き起こす何らかの事象は、私たちの一生や社会の中で、大なり小なりの価値を置かれてきたものといえる。「楽」は、実際の日々の思考や行動において重大な位置を占めているのみならず、「人間とはどのような存在であるか」、「何をなすべきであるか」という倫理学の根本的な問いかけにも深く関わるものだといえる。人は自己を超えたあらゆる存在との(繋がり)の中に置かれており、これこそが人間存在の理法の一つである「倫理」であると考えられる。「楽」は、この様々な(繋がり)を形成し、または、その(繋がり)から自然的に発生し、または、その(繋がり)において期待されているものでもある。私たちは、主體的に、あるいは無意識的に「楽」と関わりながら暮らしている。それは、自己と対象の間の(繋がり)を生み出し、仲介し、説明し、保持し、そこに巻き込まれる様々な人・事物・文化・社会に変化をもたらす。となれば、「倫理」を考える上で、

「楽」は見過すことができないものであるといえよう。

注

- (1) 『慎思録』巻之一(益軒会編『益軒全集 巻之二』、益軒全集刊行部・一九一〇—一九二一、以下『全集1』)二十三頁。なお、本論に引いた引用はすべて『益軒全集』による。また、引用資料の旧字体は通行字体に、変体仮名は現代表記に改めた。また、漢文は書き下し文とした。
- (2) 田畑真美「貝原益軒における「楽」について」『富山大学人文学部紀要』三十五、一—十九、富山大学、二〇〇一。
- (3) 岸川郁子「近世漢詩文の研究—貝原益軒の「楽しみ」の意味について—」『香椎潟』五、三十五—四十七、二〇〇五)等。
- (4) 『養生訓』における益軒の「楽」の特徴について示した福光由布「貝原益軒『養生訓』に見られる「養生」と「楽」」『藝術研究』二十一・二十二、七十三—八十五、広島芸術学会、二〇〇九)、益軒の思想における「楽」と「旅」との関係を示した八木清治「貝原益軒の旅行観と「楽」の思想」(武蔵大学人文学会雑誌三十六(三)、武蔵大学、二〇〇五)等がある。
- (5) 注2を参照。
- (6) 『五常訓』巻之二、(『全集3』)二四九頁。
- (7) 「天地万物を生ずる心は、即是天地の物を愛するの理なり」(『五常訓』巻之二、(『全集3』)二四六頁)。
- (8) この(天地の働き)は「天地の大徳(易に、天地の大徳曰生。大徳とは大なるめぐみなり。生とは万物をうみいかすを云ふ。)(『五常訓』巻之一、二三二頁)、「生」、「生理」、「元」(「この心を生と云ふ、即ち生理なり、また元といふ」同、二三二頁)、「造化の理」(同、二三三頁)等、様々な呼び方が可能である。
- (9) 『五常訓』巻之二(『全集3』)二四九頁。
- (10) 『大和俗訓』巻之四(『全集3』)一〇五頁。
- (11) 「聖人のいはゆる道なるものは、天地の生理にして、太和の元氣、常に生生として息まず。蓋し四時に流行して、万古息まざるは、これ便ち万化の本源、品物の出づる所、性命の源なり。」(『大疑録』巻之下(『全集2』、一六五頁)。なお、ここで益軒はよく知られるように、氣と理を別の存在であると見做さない理氣二元論の立場に立っている。
- (12) このような変換することのない四季の巡り、一定の形式をもって万物を生み出し続ける天地の

働きを、益軒は「天地の誠」(『五常訓』卷之一(『全集3』)二二九頁)と理解する。

(13) 『大疑録』卷之下(『全集2』)一六五頁。

(14) 「天の氣一たび地に著けば、形を成す。人物これなり。山川草木、禽獸虫魚、霜雪雨露に至るまで、みな然り。」(『大疑録』卷之下(『全集2』)一六八頁)。

(15) 『大和俗訓』卷之一(『全集3』)四七頁。

(16) 「仁者の心は、わが身ひとつを利とせず、万物とわが身と、へだてなく一体として、愛せざる物なし。是私欲のへだてなくして、公なる故に、我が心よく万物に通じ、人のうれいくるしみを見ては、わがうれいくるしみの如くいたみかなしむ。鳥獸草木までもあはれみめぐみて、そこなわず。鳥獸のころされ、草木のみだりにきらるるを見て、いたむ心あるは、皆我と一体なれば也」(『五常訓』卷之二(『全集3』)二四八頁)。程明道の提唱した「天地万物一体の仁」を益軒も継承している。

(17) 「人の禽獸にことなるは、仁あるを以てなり。五常五倫百行万善、皆仁よりいづ。」(『大和俗訓』卷之二(『全集2』)二四四頁)。

(18) 『大和俗訓』卷之二(『全集3』)四十七頁。

(19) 『楽訓』卷之上(『全集2』)六百五頁。

(20) 『五常訓』卷之一(『全集3』)二二六頁。

(21) 益軒の思想の根底には、天に対する強い報恩の念がある。「人は、父母より生ずといへど、其根本をたづぬれば、皆天地の恩によりてむまる。むまれて後、一生の間も亦天地のめぐみによりにて身をたつる。故に人の道は、只天地の恩よりして、つかへ奉るに有。天地につかへ奉る道は、
：(中略)：天道にしたがひてそむかざるにあり。」(『五常訓』卷之二(『全集3』)二五三頁)。

(22) 『初学訓』卷之四(『全集3』)三十三頁。

(23) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇六頁。

(24) 「人の元氣は、もとは天地の万物を生ずる氣なり。是人心の根本なり」(『養生訓』卷之二(『全集3』)四九七頁)。

(25) 『養生訓』卷之一(『全集3』)六〇六頁。

(26) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇六頁。

(27) 「世の人まどしくしてはうれひくるしみ、富貴をうらやみて楽なく、富貴にしてはおごりおこたりて、欲をほしいままにし、財をついやして楽をもとむれど、欲にやぶられてかへりて自らくるしみ、人をくるしめしむ。また、「世俗の樂は、其樂いまだやまざるに、はやくわが身の苦しみにぞなれる。たとへば味よきものをむさぼりてほしいままにのみくへば、はじめは快しいへど、やがて病おこり身の苦しみになれるが如し。凡世俗の樂は心を迷はし、身をそこなひ、人をくるしめしむ。」(『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇九頁)。

(28) 「内の樂を本とし、耳目を以て外の樂を得る媒として、其欲になやまされず、天地万物の景氣

のうるはしきを感じれば、其樂かぎりなし。」(『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇九頁)。

(29) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇六頁。

(30) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇七―六一八頁より抽出。

(31) 『養生訓』卷之三(『全集3』)四七九頁。

(32) 『養生訓』卷之二(『全集3』)四九三頁。

(33) 『養生訓』卷之六(『全集3』)五四九頁。

(34) 『慎思録』卷之二(『全集2』)二十二頁。

(35) 歴史的な背景として、歳時記的興味関心の高まりや俳諧等の興隆も関係していると考えられる。

(36) 『大和俗訓』卷之二(『全集2』)六十九頁。

(37) 益軒は、自己の様々な見聞や経験等からある説を立てようとするとき、できる限り精査したものを取ろうと努めた。例えば、『大和俗訓』卷之一において、学問は「博く学び、審に問ひ、慎んで思ひ、明かに弁へ、篤く行ふ」(『全集3』)五十六頁)ことを重視せよという。

(38) 『窮理』に関して、『慎思録』卷之一(『全集2』)十三頁に、「凡そ書を読み理を窮むる者は、博く且つ精からんことを欲す。博ければ則ち天下の理に於いて通ぜぬ所無し。博きと精しきの二者備わりて、後に窮理の学を為すべし。是れ知の致すの道なり。ああ、窮理の学は力を用うること久しければ、則ち天下の理に於いて通明せざる所無し。其樂亦大ならずや。」とある。

(39) 『初学訓』卷之三(『全集2』)二十一頁。

(40) 『大和俗訓』卷之一(『全集3』)五十六頁。

(41) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇九頁。

(42) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇九頁。

(43) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇六頁。

(44) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇七頁。

(45) 『楽訓』卷之中(『全集3』)六一九頁。

(46) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇八頁。

(47) 『楽訓』卷之上(『全集3』)六〇七頁。

(48) 『楽訓』卷之中(『全集3』)六二五頁。

(49) 自己「理性・ロゴスと捉えた場合、これに対して身体や無意識。また、統一的な自己に対して、他者、物、共同体、自然、宇宙、理法、神等。

(50) 高島元洋編著『近世日本の儒教思想―山崎闇斎学派を中心として 第一分冊研究篇』「思想史とは何か―『日本倫理思想史』に関する方法的反省」お茶の水女子大学附属図書館、三一―三〇頁、二〇一二)参照。和辻哲郎『日本倫理思想史』において定義される「間柄」に置かれるべきものについて、さらに反省を加えたもの。

KAIBARA Ekiken's Raku (Pleasure) and learning, focusing on *Rakukun*

SHIMIZU Mahiro

Abstract

Kaibara Ekiken, a confucian in Edo era, wrote the book *Rakukun* that illuminates appropriate Raku (pleasure) to people in 1710. The purpose of this paper is to define what Ekiken thought is the authentic Raku, from three points of view, world, human and practice. It also clarifies the core of his Raku.

In *Rakukun*, Ekiken asserts the Raku is very important for human-beings and people are not able to live without it. His Raku can be divided into two types. One is the Raku that people have by nature, the other is Raku that people obtain from things existing out of themselves, like foods, clothes, beautiful sceneries and books. He thought those Raku emerge when people live according to Jin: virtuous of human-beings, and Michi: correct way to live. That is his Raku means not only emotion, but form of existence. He indicates that people must learn to control their hearts and keep sensibility to realize those Raku all the time. That is why Ekiken described many kinds of Raku closely in *Rakukun* and aims to open their eyes. His suggestion must be useful to consider of relationships between Raku and our lives in today.

Keywords: Kaibara Ekiken, *Rakukun*, pleasure, learning, Edo era